

# 図書館を使う「面白さ」

—ひとつの図書館論—

熊 田 淳 美

## 1. 図書館は面白い

今まで図書館関係の書物といえば、大学の先生や図書館内部の人によって書かれるものが多く、一般の書店にならぶものはきわめて少なかった。ところが、ここ2、3年、日頃から図書館を利用する機会の多い作家、評論家、編集者など図書館外の著者による図書館ガイドともいえるべきものがいっせいで現れた。<sup>①</sup>これらに共通しているのは、国立、公共、大学、専門といった図書館の種類を問わず、図書館が面白くなっているということである。それは一昨1994年に「ちくま文庫」の1冊に加えられた紀田順一郎氏の『図書館が面白い』というタイトルに典型的に現れている。この分野では画期的なタイトルであった。

この書物は、これより約10年前の1981年、他の出版社から『図書館活用百科』<sup>②</sup>として出版されたものを大幅に改訂したもので、著者の説明によれば「初版が出てから10年以上の間にコンピューターの導入を中心に図書館の世界は大きく変わった」からであった。<sup>③</sup>もち論、図書館の種類や地域によってこの変化の様相はまちまちだし、そもそもこの間に新たに誕生した図書館の数も多かった。図書館が具体的にどのように変化したかは、当然この本を読めばいいわけだし、数字上のことは毎年の『図書館年鑑』を一覧すればいいだろう。<sup>④</sup>しかし紀田氏が「活用百科」から「面白い」へとタイトル変更した真意は何だろう。紀田氏にとって、図書館はもともと「面白い」ところなのだ。ところが「面白さ」が今までなかなか表面に出てこなかった。コンピューターの導入を初めとする大きな変化によって

「面白さ」が引き出されたのだということだろう。そして今こそ図書館の「面白さ」を多くの人に知ってもらって、「面白さ」を共有しようというのが真意だったと思う。

個人的なことを言えば、僕自身が紀田氏のいう大変化の最中に国立国会図書館の内部にいて、その関西館構想に関連して、情報資源としての図書館の有用性、その前提としての「面白さ」について如何に広く国民一般からの理解がえられるかについて強い関心を抱いていた。この間の1991年、未だバブル経済の破局が深刻化する前、『こんなに面白い東京国立博物館』<sup>⑤</sup>というビジュアル本が出て、いろいろな意味で一步先んじられたという残念な思いをしたものだった。「図書館だって面白い」筈なのにとというのが本音だった。世論と財政当局の理解をえて、さまざまなレベルの図書館が予算を確保するためには、このようなキャッチフレーズも必要だったのである。まさか紀田氏や出版社が国立博物館の例を真似たのではあるまいが、「図書館が面白い」という画期的なタイトルの出現は、図書館の内部にいる者にも喜ばしかった。

常に利用者の立場に立つということが、図書館在任中のモットーだったが、今回は、図書館の外にある一利用者の立場からこの問題について自由に考えてみたいと思う。

ここ数か月、各地の主に公共図書館を一利用者として見学、利用して感ずる。確かに図書館は「面白い」。規模や程度の差はあれ、以下の9点が実感として得た面白さの要素である。

1. 身近かさ 2. 便利さ 3. 資料の多様さ、豊かさ 4. 資料の新鮮さ 5. ムードの明るさ 6. 資料の探し易さ 7. 親切さ 8. 設備の新しさ 9. 珍しさ

何れの図書館もこれらすべての要素を満たしているわけではないが、このうちの2つでも3つでも満たしていれば、結構「面白い」のである。しかし、貸出しを前提とするためか、最近の公共図書館は極度に座席が少なかったり、大学受験生で座席が占められ、立ったまま調べものを余儀なく

されるなど、「面白くない」要素もある。

しかし、僕が「面白い」といっているのはこういったことではない。それはそれとして別途論ずる必要があるだろう。ここでいう「面白い」は、だいぶ曖昧になってしまうが、「楽しい」「魅力的である」ぐらいの意味でとらえておこう。図書館を使う「面白さ」を追求することで、これからの図書館のより基本的なありようが探れないだろうかと考える。そういう意味で、本稿が従来とは多少趣を異にした社会文化論としての図書館論の試みのひとつとなればと思う。

なお、ここでいう図書館は特定の種類の図書館を指さない。図書館一般を想定していることを断っておく。

## 2. 源氏物語絵巻「東屋」の絵

昨1995年秋、名古屋の徳川美術館で「国宝源氏物語絵巻展」が開催された。隆能源氏（たかよしげんじ）と通称される現在最古の源氏絵巻4巻分は、12世紀初頭に作成されたといわれるが、うち3巻分は徳川美術館に、1巻分は東京の五島美術館に所蔵されており、これを一堂に集めての展示は10年ぶりだったという。

この絵巻の絵は、数々の美術図録や全集にしばしば収載されているから、多少とも日本美術や文学に関心のある人なら誰でもそのおおよそのイメージは想起できるだろう。もっとも、この絵巻は現在では卷子の形をとらず、切り離されて、19面の絵と37面の詞書（ことばがき）の額面仕立に改装されている。尾張徳川家先代の徳川義親が昭和7年、絵具の剝落を防ぎ、その公開を目指しての大英断であった。<sup>⑥</sup>これに若干の他機関所蔵の断簡が加えられての展覧となったわけだが、本物のみが醸し出し得る迫力に溢れるものだった。

数年前の1990年東京の国立博物館で開催された「日本国宝展」にこの絵巻の何面かが出展されたが、余りの人混みで十分に鑑賞できずにいたし、今回は絵のすべてが一堂に会するというので観覧に出かけた。僕自身は絵

画にも書にも、またこの絵画より約100年前の11世紀初頭には完成していたとされる『源氏物語』そのものについても全くの素人であり、単純な本物見たさの観覧になる筈であった。

しかし今回、本物全体をじっくり眺めることによって、図集に掲載の写真をも、前回の観覧の際にも感じなかったひとつのこだわりを抱くことになった。情報提供者としての写真は部分部分を見せてはくれるが、全体の雰囲気隠してしまう。全体の雰囲気というのは本物だけがもっているのである。

あるこだわりというのは次の通りである。第50帖「東屋」第1段の絵で、二条院の邸の中、中君が異母妹浮舟を自宅に呼び、浮舟に絵本を見せ、傍らの侍女右近に詞書を読ませている場面（下図参照）。侍女に髪を梳かせる中君と妹浮舟が向かい合い、その中間の床の上に何冊かの冊子（色が剥落してして確認できないが）と1巻の巻物が置いてあり、浮舟は床に正座



『源氏物語絵巻』

「東屋」(一)部分

徳川美術館

したままの姿勢でそのうちの1冊のページをめくるかのように、あるいはめくり終えたのか、冊子に手をかけている。右手でなく左手をである。和本の冊子をめくったり閉じたりは、普通は右手で行うが、どういうわけか左手だ。しかしそのことは問わないことにしよう。とにかく、今浮舟が眺めている冊子には明らかに彩色された絵が描かれている。

中君と浮舟の間、丁度冊子が置かれている横に侍女右近が座していて、これも明らかに冊子を開き、この方はひざの上にのせている。絵巻のこの場面に対応する詞書は「絵など取り出でさせ給ひて、右近に詞（ことば）読ませて見給うに」とある。<sup>⑦</sup>そしてこの絵巻の絵が吹抜屋台という建物内部の描写技法の故に、右近の斜め後からのぞくことになるが、右近が今手にしているのは見開きの両ページ全体に文字が描かれていて、詞書であることが歴然としている。これを声を出して浮舟に読んで聞かせているのである。

浮舟が眺めている絵と右近が読んでいる詞とは一対のものということになる。紙芝居をみる子供とその説明文の読み手との関係に似ている。

### 3. 冊子の絵と詞書

これまでがこの絵の状況説明で、これから先は想像と仮説である。いずれ、どこかの図書館に出向いて各種の研究文献や他の絵巻物の図録などを探し出し、仮説の可否を確認することになるろう。そのプロセスが「面白い」のだ。疑問解決のためには専門家に聞いてしまうのが一番早いかもしれないが、自らの不勉強の恥をかかねばなるまい。それよりは、あれこれと文献に相談しながら調査を進めることの方がずっと自由で楽しい。今や図書館における文献の探し方は、ひと昔前より遥かに便利になったし、様々な形のカラー図版もふえている。場合によっては、美術館や展覧会の図録も使えるかもしれない。図書館は使うほどに楽しいのだ。

まず第1は、この絵巻が作成された12世紀初頭、物語を描いた「絵」というのは、ここに見るように、冊子形態のもの、それも恐らく日本独自の

列帖装（綴葉装または大和綴とも）のものと、卷子（かんす）本との2種類が並存していること、第2に、少なくともこの絵の場面では、絵と詞は完全に分離していて、絵を眺める者（この場合は浮舟）と、これに対応する詞を読む者（右近）が別々に存在しているということ。

第3に、この絵だけから推測すれば、この時21歳の浮舟<sup>⑧</sup>は文字が十分に読めなかった（恐らくこの場合は平がな）ということになりはしないか。広げられている絵が何の物語の絵か知る由もないが、もし浮舟に識字力があつたのなら、絵と詞の冊子を2冊並べて鑑賞するのが自然だと思うが、余りに勝手な解釈となってしまうだろうか。

もっとも、源氏物語の本文の方では、その後の浮舟は一再ならず薫や匂宮から手紙をもらうことになるのだから、識字力はあつたとみるべきだろう。<sup>⑨</sup>だとすれば、当時の絵物語は、絵ばかりでなく詞書の朗読者の読みぶりをも併せて鑑賞することだったのかもしれぬ。

浮舟の問題は別にしても、このような形態の図書が存在したというのは、源氏物語が書かれた10世紀末から11世紀初めにかけての貴族社会において、識字率はそれ程高くはなかったらしいことを物語っている。貴族の邸にはこうした冊子や卷子の図書が常備されていて、それが子女教育や自らの娯楽、慰めの道具になったのだろう。

絵と詞で別々だった冊子は、当の「隆能源氏」絵巻がそうであるように、12世紀初頭には、絵と詞が交互に現れるような「絵巻物」が絵物語の主流となる。恐らく識字率の上昇で、絵と詞は一本化したものとして楽しめることになったのではないか。現代流に言えば、一種のマルチメディア化であつた。

「源氏物語絵巻」第50帖「東屋」第1段の絵を眺めて発した疑問はこのように連鎖反応式に拡大していく。この謎解きが面白い。ミステリー小説が何故面白いかといえば、その謎解きの面白さにある。

ミステリーの場合は必ず犯罪があつて、その犯人を探し出すのが定石。犯人探しというはっきりした目的がある。そして何よりもその1冊の本の

中だけで解決してしまう。他を探索する必要もないし、犯人は必ずいる。

しかし今とりかかろうとしている謎解きは、未だ目的が漠然としており、解決の手段が幾通りもあって、様々な資料を駆使しなければならない。ミステリーを読むよりは遥かに機動力を要し、探索の場を転々とするかもしれないし、資料探しにコンピュータの世話になるかもしれない。だから図書館での謎解きは面白い。その上、こうした探索の道程の中でまた新しい疑問と新しい発見に必ず遭遇する。ますます面白いのだ。

#### 4. 識字力と図書館の役割

このころ11、12世紀の西ヨーロッパには未だ紙というものは伝わってきていないし、源氏物語にみるような純世俗的な物語も絵画も現れていない。しかし一方、各地に散在する石造の修道院の中では修道士によってパーチメント（主に羊皮紙）によるギリシア、ローマ古典を含む写本の作成と蓄積が進み、修道院図書館が各地に出現しつつあった。

源氏物語の舞台となった平安貴族社会は、その地域的集中性の故にかえて、その文学を十分に管理、蓄積できずに終わった。その上、京の都は余りに火災が多く、火災に弱かった。現に、源氏物語の完成後100年も経て作成され、僅か4巻しか残存していないこの『源氏物語絵巻』の詞書さえ、現存する物語本文の最古の写本というくらいなのだから。

さて、さきにわれわれは絵巻のなかの浮舟やその時代一般の識字力について触れた。しかし、問題なのは、20世紀末のまさにわれわれ自身の識字力(literacy＝読み書きの能力)である。試みに、流麗極まりないこの絵巻物の詞書を眺めてみるとよい。一体どのくらいの人がこれを直接読むことができようか。この時代の歴史、文学、書に親しんだ研究者や学生ぐらいにしか読めないだろう。つまりわれわれの多くが、この仮名については非識字者(illiterates)だということだ。このことは、なにもこの絵巻に限らない。少なくとも明治以前の写本とか版本あるいは古文書の文字についてもいえるだろう。

これからの図書館の役割を考える時、このことの認識は重要である。一般に識字力というと、ある特定の時代なり特定の国の人々が、その所属する同時代の文字が読める人口の程度をいう。しかし、ここではもっと広い意味で用いることにしよう。即ち、現代のわれわれに読めないすべての文字や文章、そしてその意味が理解できない場合、これを識字力がないのだと。

そうすると、浮舟に識字力がないとしても、浮舟にはこの絵のなかの右近のような代読者がいたわけだが、現代のわれわれはどうするのか。今、この僕がそうしているように、展覧会場で購求した図録『源氏物語絵巻』によって、詞書のかなをそのまま活字におき替えた翻刻部分と、必要な箇所を漢字化したり句読点を加えた校訂部分を読むことによって原仮名を読む。これで不足なら、他に注釈書や現代語訳本を用いる。こうして文字そのものの識字力がなくとも、その内容を知ることができるわけだ。外国語についても同じことが言える。

改めて言うまでもないが、こうしたことが可能なのは、長年にわたる多数の研究者、専門家らによる調査、研究の成果によるのであって、今これを最初から独力でやり直すようなことはしない。まして今の僕のように、たまたま行きずり的に関心、疑問を抱いた者は、詞書解読の労をとることはない。他人様の成果＝情報をもらい受ければ良い。無料でもらうのが具合悪ければ、買えばよい。

現代社会では、一定の対価を支払えば、他人の成果＝情報を入手できるし、全体がそのようなシステムの上に成り立っている。ある場合には、それは大学の授業料や講演会の受講料として、多くの場合は図書や雑誌の購入費として。いったん支払いが済めば、その情報を、自由に利用、応用することが可能だ。先人の成果の中には、全く無償のものも多い。むしろその方が遥かに多い。余りにも馴れっこになり過ぎているが、それは円周率であったり、面積の公式であったり、ピタゴラスの定理であったりする。

対価を伴おうが伴うまいが、そしてその分野の如何にかかわらず、先人や同時代人の成果＝情報を得ることによって、つまり彼等と同じ苦労を繰



返さずとも、次の新たな創造への出発点に立てるというわけだ。現代社会は、そのような人類の知恵の積み重ねの上に立っているのだ。

先人の成果＝情報を財産として蓄積し、これを共同で利用できるシステムこそ現代の図書館に他ならない。さきに先人の成果を得るのに対価を支払うケースについて言及したが、個々個人の直接の経済負担のみならず、資料を選ぶ時間とか、それを収蔵する場所とかの時間的、空間的な負担をすることなく、負担するとしても相対的に少ない負担において、利用する側がこれら情報を共同で利用できるシステムが図書館なのである。

現代の図書館というのは、恩顧的なものではなく、利用者が所属するコミュニティ（しばしば重複するが）、大学、地方自治体、国といったコミュニティに対して何らかの出資をすることにより、図書館資料＝情報という財産を共有化し、機会均等の利用を保障するシステムである。強制加入の健康保険組合や生活協同組合のようなものだ。使い方が上手ならば、利用の少ない出資者より遥かに大きな利益を得る。図書館の利用は益々面白くなってくるはずである。

序でにいえば、図書館に関する数々の論議には、図書館の文化的、教育的側面が一方的に強調されることがしばしばだが、これを支えている社会的、経済的存在理由なり暗黙の合意なりについて、改めてはっきりした認識をもつことが必要であろう。さもないと図書館の存在自体が孤立、独善的なものになってしまうだろう。

ならば、どうしたら図書館が上手に利用できることになろうか。まず好奇心を抱くことである。学術的なことから下らないことまで、また公私とりまぜて様々だろうが、好奇心をもって次々に課題を追求することだ。

今やその追求の手段は1980年代以降のコンピュータの発達、とりわけ文字のデジタル化によるパソコンやCD-ROMの発達で著しく便利になった。機器を直接操作できるに越したことはないが、まだ慌てることはない。コンピュータ技術発達の成果は、結構印刷出版物そのもののものに反映しているのだから。

例えば、かつての日本の書物、特に研究書の類は欧米のものに比べて圧倒的に「巻末索引」の発達が遅れていたが、今や編集段階での技術は索引作りを容易にし、文献の利用は遥かに便利になった。このように間接的にコンピュータ技術の成果を利用できる分野はふえている。

図書館にコンピュータが導入されて、利用者が端末から目録検索や記事検索もできるようになったが、個々の文献の「目次」や「巻末索引」を検索できるにはまだまだ遠い。未だ文献名が探し出せる位のところである。それでも大変な進歩である。

自分で文献の探索が困難ならば職員に訊ねればよい。最近の図書館には、そのように訓練された職員が配置されているのが普通になった。時々まとはずれな答や不親切な答が返ってくるが、それはこちら側の聞き方が悪いくらいに思った方がよい。実際、訊ね方の下手な人が多い。日本人の悪いくせで、恥をかかずに済まそうとするから訊ね方が曖昧になる。「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の損」くらいに思っていた方がよい。しかし図書館利用の面白さは飽くまで自分で探すことである。

何れにせよ好奇心さえあれば、どこの図書館も面白い。そうした知的冒険が可能になったということだし、くどいようだが、過去、現在の成果の上に立って、新たな創造が益々可能だということである。それは結局、当の本人ばかりでなく、これからの社会全体の利益になるだろう。

## 5. 情報のデジタル化とマルチメディア

これまでのところ、文字や文章の識字力ということから図書館の可能性を論じてきた。ここで再度「源氏物語絵巻」に戻してみよう。この絵巻の中に楽器を演奏している場面が3枚ある。<sup>⑩</sup>当時の音楽や楽器のこと、これについても好奇心が湧いてきて謎解きはきりないが止めておこう。

問題は、当時の宮廷の人はこの絵を眺めると同時に、そこに奏でられている管弦の感じが実感できて、音を含めた情景全体を共感できただろうということである。字が読めずとも、詞書の読み手の声と、心に描く音によ

って情景を適確に楽しむことができたのだろう。同時代の人にとってこれは可能なことに違いない。結局、20世紀のわれわれには、絵と詞の目でみる部分だけが残されたことになる。口と耳、つまり音の部分は口誦によるか譜面にする以外に残せる術はなかった。文字の世界でさえ写本という形を重ねるごとに多かれ少なかれ変化していったのだから、音の世界の方は遥かに厳しかった。

古代ギリシア、ローマのあの巨大な大円形劇場や闘技場に満員の観客を集めて行われた演劇とか、音楽とか、猛獣との格闘などというのは、それを実感できるようには現在のわれわれには伝わってきていない。そこで見、聞くものは飽くまでその場その時1回限りで、同一物を2度と経験することも、時、空共に他に伝えることもできなかった。当時の人びとは、その非識字性の故にかえってその瞬間、瞬間を十分に堪能できたのだと思う。

文字の世界では、印刷術とりわけ15世紀西ヨーロッパでの活版印刷術の実用化で、同一物を同時に多数に公開、伝達でき、蓄積もできるという革命の変革をもたらした。音や映像の世界でこのような変革が現れたのは周知のように遥か後のことだった。録音技術、写真技術を含む録画技術が実用化したのは19世紀末から20世紀にかけてであり、それらのデジタル化というのはここ数年の動向にしか過ぎない。唯一無二の演劇、音楽、スポーツの世界、いわばパフォーマンスの世界は、全くの同一物ではないにせよそのコピーを複数作成し、個人で所有することも、図書と同様、図書館に収蔵して利用できるようにもなった。

恥かしい話だが、かつて若いころ、小林秀雄のあの有名な評論『モーツァルト』（昭21）を初めて読んだとき、あそこに出現するいくつかの短い楽譜が読めなかった。その上、モーツァルトのレコードさえ持てなかった。楽譜が読めないことには、あそこに書かれている文章はまさに意味不明の言葉の羅列だった。楽譜についての非識字性は文字の非識字性と同じことだった。

小林はモーツァルトの弦楽五重奏ト短調(K516)の第1楽章冒頭部分の



しく向上させる。この特性にふさわしい分野では、国立図書館など大規模図書館を中心に文献そのもの＝テキストのデジタル化が大いに進むだろう。これを電子図書館と呼ぼう。この電子図書館は大学、研究所、オフィス、家庭、そして各地の図書館と何らかの形でオンラインで結ばれており、その端末器を通じて電子図書館の情報が提供される。利用者は発信元の図書館に直接赴くことなくリアルタイムで情報を入手することができるというわけだ。

しかし、このようにデジタル化＝電子化される文献は、全体からすればそれほど多くはないだろうし、そもそもすべての図書館が同じような機能、同じような役割を果たすわけではないのである。

## 6. ふた通りの図書館の共存

人間がある場に臨んで、その雰囲気から目や耳からだけでなく体全体で感じとる感性とか情報。「源氏物語絵巻」の実物だけが醸し出すあの色合い（多くの古代仏像がそうであるように、たとえ制作当時の色合いでなくとも）、若者が集まるロック会場や競技場全体を湧すラグビー場の熱気。端末画面上のマルチメディアがどのように発達しようが、生（ライヴ）とか原物（オリジナル）には文字通り生の良さがあり、それがかえって多くの人々の魅力をひきつける。しかしまた翻って考えてみよう。そもそも生のその場に臨める人が、時間的、空間的、経済的にも極めて限られていたからこそ、印刷術も録音技術も放送技術も発達し、それによって多くの人に共有の情報をもたらしたのだった。もはや一方が他方を駆逐することはありえない。共存し、相補うことに積極的な意味がある。

このことは、これからの図書館のあり様を示唆している。ふた通りの極を考える。ひとつの極は、前節末に現れたような最先端の電子図書館とそれに接続する端末器群をひとまとまりにした図書館システム。もうひとつの極は、従来型の中小図書館。この図書館には電子図書館の端末も接続されてはいるが、メインは従来型の書物そのもの。書棚の書物をあれこれ手

にとってブラウジング(拾い読み)しながら機械に頼らない発見の旅もする。

かつての写本が、印刷物に対するライヴ版であったとすれば、パソコン画面上の文字情報に対するライヴ版は紙に印刷された従来の書物というわけだ。このような図書館は、身近にもっと作られるべきだろう。

ふたつの極の間にはいくつもの変化はありうる。要は、利用する側のその時々目的に応じて選択が全く自由であることである。利用する側に選択の自由があることによって、それぞれの図書館は相補って共存して行くであろう。

超音速のジェット機が飛び、新幹線が疾走する一方で、自転車があり、狭い脇道があるように、大きなデパートがある一方で、小さな専門店があって、それぞれがその特徴を生かしながら共存している。

図書館におけるきわめて人工的なものと感性的なものとの共存によって、先人たちの成果の上に立った新たな創造が可能となるだろう。そのことで、全体としての図書館は、ますます「面白さ」を増すことになるだろう。

(注)

1. 能本功生ほか「図書館をしゃぶりつくせ」宝島社 1993. 11 (別冊宝島EX)  
紀田順一郎「図書館が面白い」筑摩書房 1994. 2 (ちくま文庫)  
海野弘「日本図書館紀行」マガジンハウス 1995. 10
2. 紀田順一郎「図書館活用百科」新潮社 1981 (新潮選書)
3. 紀田「図書館が面白い」P. 336
4. 「図書館年鑑」各年版 日本図書館協会
5. 新潮社編「こんなに面白い東京国立博物館」新潮社 1991 (とんぼの本)
6. 徳川美術館編「源氏物語絵巻」徳川美術館 1994. 11 (新版徳川美術館蔵品抄2)  
PP. 150, 151
7. 同上書P. 135
8. 同上書P. 138
9. 池田亀鑑編「源氏物語事典下」東京堂出版 1960 P. 323
10. ①第38帖「鈴虫」第2段。満月の夜、冷泉院と源氏が向い合って語らう傍らで、公達のひとりが横笛を奏している  
②第45帖「橋姫」。やはり月の夜。宇治の八宮邸を訪れた薫が透垣(すいがい)を押しあげて垣間見る筍(そう)(琴)と琵琶を合奏する姫君姉妹。  
③第49帖「宿木」第3段。匂宮が妻中君を前に琵琶を奏でる。
11. 「小林秀雄集」筑摩書房 1969 (現代日本文学大系60) P. 117